

町民の皆さんと共に

スポーツの振興と健康づくり

NPO町体育協会・専門部の活動紹介⑨

●あなたも気軽に参加してみませんか！



随時参加者募集中!

陸上部

年間を通じて、土日祭日の朝六時半～七時半に下諏訪競技場集合が活動の中心です。朝早くに活動しているのには理由があります。陸上競技の素晴らし、楽しさを伝えていくために多くの人に参加して頂きたいからです。また、早起きで規則正しい生活は陸上競技の基本です。夜更かしはできません。また、他競技との掛け持ち選手も参加して基礎体力向上に励んでほしいと思います。一時の間練習というのもこだわり活動していません。小中学生時代に練習をやり過ぎず短時間集中で良い動きを身に付ける事が大切です。基礎体力づくりの内容の練習が大切です。基礎体力づくりの内容の練習が大切です。基礎体力づくりの内容の練習が大切です。



陸上部
部長 金高 金義
電話28-6547

相撲部

相撲は日本古来の神事や祭りであり、同時に武芸でもあり、武道でもあるといわれています。最近では、日本由来の武道、格闘技、スポーツとして国際的にも行われています。体協相撲部は武道の精神を大切に、未来ある子供たちに、相撲を通じて礼儀作法や、努力すること、苦しさに耐えること、勝つことの喜び、負けることの悔しさ、敗者への思いやりを学ぶことで、心豊かな子供に育つてくれることを願い、心身の鍛錬と健康の増進をはかることを目的に年三回の相撲大会を実施しています。六月には東京国技館で行われる全国大会の予選会「わんぱく相撲大会」八月二日お舟祭りの「少年相撲大会」八月下旬開催の「御射山神事相撲大会」。子供たちの、大社八幡山の土俵に立つ勇氣ある姿を、家族揃って応援しませんか。



相撲部
部長 山田 治
電話27-2822

「諏訪のいろはかるた」お正月特集号!



全国各地に存在する郷土かるた。多くは絶版となり現在では入手が困難です。ふるさとの財産「諏訪のいろはかるた(信濃文化研究会作成)」に詠われたかるたを紹介します。

ふおと★すどーりー～みたまま そのまま～はお休みさせていただきます。～郷土かるたで故郷の故郷発見～

れ

烈風をしのぐ雑鎌風祭



九月の穫り入れ前に行われてきたのが農家の厄日、二十日であった。今でこそ気象観測が発達して、時々刻々に台風の進路も伝えられるが、昔の台風は突然やって来た。そして一年、丹精を込めて作りあげた農作物をだしなにしてしまった。農村では「なぎがま」や鎌を軒先に高くかかげ、風をよける風祭りを行った。鎌が風を切った、その風の力を分散し、風をよける信じたからであった。神事に使う雑鎌は蛇体・鳥体・魚体などいろいろあって、国境の木などに打ち込んで神の領地の境界の標示とした。また雑鎌をもって神を祀る儀式にしたともいわれ諏訪明神のご神体との説もある。この雑鎌の出現は驚異の出来事であったらう。軒先高くかかげ、無事平穏を祈る素朴な風習であった。

た

大安寺おし流されて跡は桑畑



信州瑞雲山大安寺は、勅願によって全国各地に建立された官寺の一つであって、有賀村の山ぞいにある。広大な境内には七道伽藍が立ち並んで、住民の崇敬を集めていた。永禄八年(一五六五)五月、折からの梅雨は集中豪雨となった。大安寺の裏山を崩して谷川を堰止めた、さらにその水が鉄砲水となって押し出したのであった。まず大安寺の大伽藍・堂宇・僧房をひとみとした土石流はさらに下流にあった村落を押し流した。一木一草も残さず、家を失うもの数を知らず悪夢のような一瞬であった。時の住僧が寺宝を拾い集めて小庵を建てていたのを、後年諏訪藩主頼水が名刺の表を惜み江音寺を建立して、これに移したと伝えられている。かつての寺域は今も桑畑となつてその面影もない。わずかに「大安寺跡」という地名が残るばかりである。

わ

吾に躰なし祝をもつて躰となす



諏訪神社には古く大祝と称する現人神があつて、信仰の対象となつてきた。桓武天皇の皇子有賀親王が、大祝の位についたのであるが、このとき明神は御衣を脱ぎ着せて「吾に躰なし祝をもつて躰となす」と神勅を下した。ここに大祝職は確立したのである。大祝は建御名方命の後裔といわれ、代々世襲によって相続された。よって有賀は御衣祝といわれ、やがて神氏の始祖となり、後諏訪氏となるのである。大祝は首長として祭祀権をもち、諏訪郡を領有し、守屋山麓前宮の地を本拠とし、祭りや政治を合せて行ったのである。中世になって惣領家と社家が分立し、惣領家は茅野市原に、社家は前宮の地を居館とした。戦国期になって両家に争いもあつたが、やがて社家は亡び、江戸時代になりまた社家が分立し、明治維新まで続いたのであった。

か

華麗なる井戸尻出土の原始土器



井戸尻遺跡は、ハケ岳の広大な富士見原野に展開された古代民族の生活の跡である。尖石遺跡と同じように、井戸尻遺跡も大集落を形成していた。そしてこの遺跡からは、完形土器が数百点も出土しており、いずれも豪放華麗、量感溢れる原始時代の文化を代表するものとして、その頂点にあつたといわれている。古代民族の遺物である土器は、その材料である粘土がどこでも得られ必要に応じて誰でも自由に作られた。生活のための創意工夫もあつたが、長い年月をかけて技術水準は高まり、文様も装飾的となった。土偶のようなすっきりした顔面が土器の縁に作られて、渦巻きや蛇の文様が美しい表現となって土器を飾っている。なお、この遺跡から出土した土器は、ヨーロッパの美術館に飾られたり、郵便はがきの図案になるなど、あまりにも有名である。

を

麻幹でちよいとかついだ大泉小泉



「でえらぼち」という巨人が住んでいた。ハケ岳に足をかけ、浅間山に腰をおろして煙草を吸っていた。その煙草が今も燃えつづけている浅間山の煙であるといわれる。ある日のこと「でえらぼち」は蓼科山に土を盛って、富士山に負けぬ格好のよい山を作ろうと考えた。そこで、諏訪の平の土を手ですくってここにのせた。二つの土の塊といつても、おおきな山であったが「でえらぼち」はこれを「おんがら」の両端にかけてかつぎ、守屋山からハケ岳に足をかけてまたごとくしたらおんがらが折れてしまった。ようやく粟沢で一本のおんがらを手に入れて帰って見るともつこに盛った土に根が生えて持ち上がらなかつた。「面倒だ、こんなものはいらねえ」と「でえらぼち」はどこかへ行ってしまった。それが大泉山・小泉山であつたといわれる。

り

竜宮の鐘奪われた小坂沖



蓼科山の麓、湯川村に功德寺といふ名刹がある。大昔、この寺の梵鐘を小坂の観音院に移すことになつて、村中総出で運んで来た。そして、上の諏訪からは諏訪湖を横切つて舟で運ぶことになった。重い大きな梵鐘をやつと舟に積み込んで舟は滑るように湖面を走つていった。ところが、ちよと諏訪湖で一番深い小坂沖に差しかけたとき、一天俄にかき曇つて、雷のような大きな音がしたかと思つと湖の水が大きく割れて、大竜が出現したのである。その竜があつたという間に梵鐘をかかえて湖中深く沈んでいった。それから後、波の静かな日に湖畔に立つて耳をすますと、湖底からかすかな鐘の音が聞こえて来るといわれる。あるとき近くの若者が湖底にもぐつたところ鐘をしっかりと守っている竜を見たという。それから「あれは竜宮の鐘だつた」と語られるようになった。

に

二之丸の夢破れたり諏訪騒動



諏訪高島藩では、二之丸諏訪氏と三之丸千野氏が代々家老職をつとめていたが、両家はその勢力を争うようになった。六代藩主諏訪忠厚は、藩政を二之丸諏訪図書の子大助と、三之丸千野兵衛にまかせたままであつたので、それが両家老の対立を激しくさせることになった。諏訪家のお家騒動も世継ぎ争いであつた。忠厚の夫人政の方は実子がなく、側室おとめの方に長子軍次郎が生まれ、他の側室おきその方に次男鶴藏が生まれた。千野兵衛は軍次郎を、諏訪大助は鶴藏を、それぞれ世継ぎとして二派に分かれて争うようになった。この二家老の勢力の消長によって、藩政は右に左にゆれていったが一度は大助方に有利に展開していった。しかし必死の兵衛は要所に訴えることによって情勢は逆転して、軍次郎の家督相続に決まつた。大助は切腹、その仲間がそれぞれ処断され諏訪騒動は終わった。天明二年(一七八二)七月のことであつた。

る

流罪にて諏訪六十年の忠輝公



松平上総介忠輝は家康の六男であつた。大阪夏の陣に、大和口の総大将として二万の兵を率いて出陣したが、到着が遅れたという理由で、家康の怒りに触れて飛騨の高山へ流された。それから寛永三年(一六二六)からは諏訪高島城の南之丸に九十三歳で没するまで、五十八年間幽閉の身となつた。高島藩では忠輝を流人として扱わなければならなかつたので非常に苦心した。晩年にはかなりの自由が与えられて、墓所となつた貞松院などを訪れては、その任職と囲碁に興ずることもあつたようである。いまでも貞松院には忠輝の遺品と伝えられる「野可勢の笛」など、ゆかりの品々が納められている。この笛は、平家物語で有名な平敦盛が吹いたものといわれる。忠輝は生母や天海僧上などの取りなしにもかかわらず、ついに許されることなく諏訪の地で生涯を終つた。

と

尖石は縄文時代の大集落



縄文時代の人々は食料を求めて住居を移動して歩いた。その一群がハケ岳の裾野に広がる台地に住みついた。尖石が古代人の遺跡として学界に知られたのは明治のころで、その後の発掘によっておびただしい住居跡が発見され、また土器・石器類も数えきれぬほど発掘された。この集落がもつとも繁栄したのは縄文中期であつた。人々は数千年にわたつてここに住みつき、平和で文化の花が開いた時代であつたようである。尖石の古代人の集落跡は、特別史跡に指定されている。遺跡の中程に、三角形の大きな石が一つ突きささるようになつて立っている。その土に埋まつている部分は尖つた頭部の片側が楕円状になつてくぼんでおり、石器を研いだ共同の砥石であつたといわれている。その形から尖石と呼び、地名もこれから生まれるが、地元の人たちは「どがり石さま」といつて今でも祀っている。